

10代の母という 生き方 ⑭

大川 聡子

★まえがき

前号から引き続き、若年母親グループに関わるボランティアグループメンバーへのインタビューを基に、ボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにし、若年母親を支える地域づくりについて考察します。

3. 若年母親に関わることの難しさ

1) 【相反する役割期待】

(1) 《母親役割を重視して若年母親をとらえる》

① 〈子どもをしつける親として振る舞うべき〉

Cさんは、若年母親に最も必要だと思うことは「人の話を聞く」姿勢だと考えていました。スタッフが「Z」が始まる時のあいさつや、今日の流れの説明をしていますが、メンバーが友達と話をしている様子を見て、もう少しけじめをつけて欲しいと言う思いを持っていました。

Bさんも、子どもをしつける存在として、若年母親自身も親らしく振る舞って欲しいと望んでいました。

(メンバーは) 人の話聞きやれへんわね。それが一番 (必要だと思う)。 (スタッフが) 説明してはっても、こっちの友達と隣同士で話したり、(略)「今から (Zを) します」言うても、お隣同士でピャーと話したりしてやるから。ああいうの、もうちょっとけじめつけた方が。(Cさん)

一応、親やねんからね。その(人の話はきちんと聞くということ、子どもに言うて聞かせていかなあかんねんからな。(Bさん)

②〈子どもより親の欲求を優先している〉

Aさんは、Aさんの世代が育児をしてきた時代は子どもが第一でしたが、若年母親は子どものことよりも自分のことが優先となってしまうがちであり、関わり方が難しいと感じていました。

Aさん そういう（自分を優先している）のはちょっと感じるかな。私らの時はね、子どもが第一というか、そういうので来ましたからね。そういうのが、ちょっと分からないかな。（Aさん）

自分犠牲にしても子ども優先やもんね。昔はね。今はどうなんやろね？（Cさん）

(2) 《10代であることを重視して若年母親をとらえる》

①〈自分を優先することは仕方がない〉

Bさんは、母親達の年齢を考えると、自分を優先することは仕方がないという思いを持っていました。

そら(子どもよりも自分のものを)欲しいと思うわ。年からいうとな。子どもよりも親のほうかな。そんな思ってもええ年齢やわな。（Bさん）

②〈いざとなれば子どもを一番に考えると信じる〉

Aさんは、自分中心に考えているように見える若年母親も、いざとなれば子どもを一番に考えるだろうと「信じて」いました。

いざとなったら子どもをね、あれしやる（第一に考える）とは信じてますけど。（Aさん）

2) 【若年母親との距離の取り方の難しさ】

(1) 《若年母親側の認識を知りたい》

①〈どのような存在ととらえているのか知りたい〉

Bさんは、ボランティアが母親からどのように認識されているのかを気にかけています。しかし、母親側からボランティアに声をかけることは少なく、どのように思われているのだろう、自分達に気を許してくれているのだろうか、という思いを持っていたが、自分の中にとどめていました。

どない向こう(母親たちは)思っはるのかなって、私は思ったりするんですわ。だから、おばちゃんらに気許してくれてるんやろかなあ。どんな目でおばちゃん達を見てはんのかなあ、って思ったりするんですわ。（Bさん）

(1) 《拒絶されることへの恐れ》

① 〈関わることで疎ましく思われることへの恐れ〉

Bさんは、若年母親に積極的に話しかけるのを躊躇する理由として、こちらが親切と思っ
てしたことが相手側にどう受け取られるか分からないこと、相手のバックグラウンドが分
からないことを挙げていました。

あの子なんか、1人しょんぼりしてたら、ちょっと声かけてあげたいけどなあ。余計なこと
となんかなあって、1人思ったりする時あるんですわ。「小さな親切、大きな迷惑やっ
たら困るしな」思うて。(Bさん)

(1) 《積極的にかかわることの難しさ》

① 〈母親たちの周囲の人から助言をもらって欲しい〉

ボランティアは、参加当初のスタッフからの助言や、《拒絶されることへの恐れ》を持
っていることから、「自分から積極的に関わることはできないが、何か困ったことがあれ
ば、周囲の人に助言をもらって欲しいという思いを持っていました。

困ったことがあったら、周りの人に(Bさん)

助言してもらてね。(Cさん)

ちょっと声かけてくれはったらええかなと思うだけで、こちらから言うていく事はないと
思うんですけどね。(Bさん)

② 〈母親側から話しかけてくれればより親しくなれる〉

Bさんは、〈疎ましく思われることへの恐れ〉から、ボランティア側から話しかけにくいと考
えていました。そのため、母親側から話しかけてくれればより親しくなれると感じています。

嫌でなかったら、向こうからお話しなさっていただいたほうがね。より親しくなれるんじ
ゃないかなと思ったりしますね。(Bさん)

(2) 【雰囲気づくりに徹する】

① 《グループに来所しやすい雰囲気づくり》

〈小言は言わない〉

ボランティアが母親達に積極的に関わりにくい理由として、来所しやすい雰囲気作りへ
の配慮が挙げられました。ボランティアは、若年母親は育児に対して既に周囲から意見さ
れているだろうと考え、これ以上意見することで、母親がグループ「B」に来にくい状況に
なることを恐れています。子どもをきちんとみているのならそれで良い、と10代らしい育
児を容認する発言も聞かれました。

家で言われてたとして、ここへ来てまたそんな小言みたいなこと言われんのが嫌やって思
って来はらへんようになったらいかんもね。そやから、なんにもね？（同意を求める）
なんにも。ただもうそこへ来て、なんかあったら、「どうしたん？」「ここ、ケガしてや
った。どうしたん？」とか、そんなことぐらいは聞くけど。なんにも「ああしたらいいよ」
とか「こうしたらいいよ」とかは言わなかったですね。（Cさん）

〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉

ボランティアは、母親に意見することに対しても「自分の子でもない」からと配慮をし
ています。そして子どもをきちんと見守ることが、自分達の役割であると認識していまし
た。

（グループに）来やすいようにね、してあげな。やっぱりね。つついね、私らでも家で
も孫に、自分の子でもないのに孫にポンポンとこう言うでしょ。そんな言わんとこかな
思うねんけど、つついね。そういうことやっぱり言われたら、その子自身も嫌やんか。
そやから、なるべく言わんほうがええの違うかな。ただ、赤ちゃんさえちゃんと見守っ
てあげたら、もうそんでいいのかなと思ってね。（Cさん）

〈ほっとできる場づくりに徹する〉

ボランティアは、母親達がほっとできる場作りを意識し、小言のようにとらえられかね
ない忠告はせず、母親達を見守る姿勢をとっています。

そやから、ここへ来たならもうほっとしたいからね。もうよそからはいろいろ聞きたくない
と思うけどね。（Cさん）

親切がな、ひよっとしたら向こうに対してな、苦い言葉になってもいけないし。ここへ来
て、ほっとしに来てはんのやったら、それ(こちらから声をかけない)がベストじゃないで
すかね。（Bさん）

(3) 【関係を構築する】

① 《母親達との関係構築》

〈親しみを持って話しかけてくれた〉

若年母親達に「慣れさせられた」という B さんは、「しょんぼりしている母親に声をか
けてあげたい」といった、若年母親と積極的に交流したいという思いを持っています。こ
うした思いに共鳴したのか、母親も B さんに対し気安く話しかけてくることもあるそうで
す。

ちょっとさっき隣で気安く…まあ話し方はね、ちょっと。でも、案外なんか親しみを持ってくれるような、もの言いをしてくれはったからね。ああとと思ってたんやけど。さしてそんなに(母親達が)変わったとは思わないんですけどね。(Bさん)

IV. 考察

1. ボランティアが持つ若年母親への認識の変化

若年母親は、「10代」であり「母親」であるという、2つの側面を持っています。こうした母親達を支援するボランティアは、《母親役割を重視した若年母親のとらえ方》と、《10代であることを重視した若年母親のとらえ方》という、相反する役割期待の中での葛藤が見られました。またボランティアと母親との関わりの中で、《若年母親側の認識を知りたい》という思いはありますが、《拒絶されることへの恐れ》から、関わりたいという思いを持ちつつも若年母親達に積極的に関わることができない状況にありました。しかし、直接的に関わらなくとも、〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉と認識し、〈ほっとできる場づくりに徹する〉ことで、ボランティアは若年母親を間接的に支援しています。このことから、ボランティアは「B」において母親達と関わる上で距離の取り方に戸惑いつつも、適度な距離感を保ち、関係を構築していくきっかけを作っていると考えました。

若年母親は、年齢の違う母親や近隣住民からの認識を敏感に感じ取っているため、もしボランティアが小言ととらえられるようなことを言えば、若年母親との関係を築くことは困難だったでしょう。ボランティアはこれまでの支援の積み重ねから、自分自身の「母親」という枠にとらわれず少し想像力を広げ、自分たちの思う「親切」が彼女たちにとって「苦い言葉」ととらえられるのを恐れ、パターンリズムに陥らないよう自身の役割を「見守り」ととらえ、場づくりに徹していました。こうした状況を若年母親達がどのように受け止めているのかは明らかになりませんが、ボランティアに親しみを持って話しかけてくる母親もいることから、母親達もボランティアの役割に気づいており、お互いに理解を深めようとしている過程にあると考えました。このように、ボランティアは若年母親達を見守り、理解しようとすることで、母親達と関係を構築している過程にあると考えました。

大川(2010)の調査では、周囲からの反応に傷つく若年母親たちの存在が示されましたが、ボランティア側も【距離の取り方の難しさ】を感じていることが明らかになりました。これまで若年母親と関わったことのない多くの人々には、彼女らが妊娠や出産に向けてどのような思いを持ち、どのように生活し子育てしているのか、その実態は分かりません。若年母親の実態を知らず関わり方が分からないことが、偏見につながっていくことも考えられます。しかしボランティアは若年母親と関わることにより、母親への視点に変化を生じさせ、若年母親の育児を受け入れ理解しようとしていました。このように地域住民が若年母親の実態を知る機会を作ることが、若年母親の育児支援の一つとして必要であると考えます。

2. 若年母親とボランティアをつなぐ試み

「更生」を目的にボランティアへ参加する更生保護女性会メンバーと、「同年代の母親との交流」を目的に集まってきた若年母親達は、それぞれの目的が異なりますが、こうしたグループがなぜ機能するのでしょうか。その背景には、母親同士という仲間意識と土着性があると考えます。ボランティアは、グループでの若年母親の振る舞いに戸惑いつつも、「母親なのだから、子どもをみてくれると信じている」といったような、母親である者同士の期待を持って若年母親達を見ていました。近隣住民からの意識を敏感に感じる母親達も、ボランティアは受け入れ、グループは機能しています。田間（2001）は、ある個人が、「女性」というアイデンティティを持ち、それが個人にとって重要なアイデンティティである場合、その個人は自己の重要なアイデンティティを維持するためという理由によって母性を主体的に内面化しやすい、といます。ボランティアは、母性を主体的に内面化したことにより、同じ「母性」を持つ10代の母親たちを愛情を持ったまなざしで見守り、支えていると考えられました。さらに、同じ地域に住み生活圏域をともにしているという土着性が、より親しみを感じる要因となっていると考えられます。

こうした、社会的に不利な要因や多様なニーズを持ち、地域におけるつながりを求める人々と、ボランティアとして積極的に地域住民に関わりたいと考える両者を結び付けることは、意義深い取り組みであると考えます。グループ「B」において、ボランティアと母親達とをつなげたのは保健師でした。こうした社会的なニーズを持ち、地域から孤立しやすい人々と地域住民を仲介する役割として、保健師の存在は非常に大きいと思います。保健師の多くは保健所、市町村等の行政機関に所属し、支援が必要な対象者に向けて、個別あるいはグループ支援を行っています。また、地域住民の組織化活動を行っており、地域の住民活動にも精通しています。こうした特徴を生かして、保健師は支援が必要な人と地域住民を仲介し、関係を構築する機会を提供できると考えます。

地域住民とボランティアをつなぐ取り組みとしては、児童委員が子育てサロンを主体的に行っている地域や、乳幼児健診の際に地域の児童委員を紹介する地域もあります(厚生労働省, 2009b)。今後は、地域住民ボランティアや専門職が連携して、お互いの専門知識や経験を基に支援が必要な人々を支える地域づくりを行っていくことが必要でしょう。

若年母親がグループ「Z」等で、親族でなく同世代の母親でもない異なる立場を持つ人々と弱い紐帯を構築することで、若年母親が社会的に不利な状況から移動する機会を作り、地域に受け入れられていると認識することができると考えられます。このような場を継続的に設けることが、若年母親だけでなく、地域住民同士がともに支えあう地域づくりの一助となるでしょう。

研究の限界

本稿はまた一部の団体のメンバーの語りであることから、得られた内容に偏りがあります。しかし、これまで明らかにされてこなかった、若年母親に関わる地域住民の認識について分析することで、若年母親の地域における理解を促す方策を検討するための一助となったと考えます。

おわりに

本稿では、地域住民ボランティアへのインタビューを通して、地域において若年母親と地域住民がどのように関係を構築しているのかを明らかにしました。周囲からの視線を敏感に受け取る若年母親にとって、地域住民との関係構築は大きな意味があります。地域での支援枠組みを構築していくことで、若年母親が育児をしやすい環境を整えるのみならず、固有の支援を必要とする人々がともに支え合える地域づくりの第一歩となると考えます。

謝辞

インタビューにお答えいただき、いつもグループ「B」を温かい雰囲気の中で包んでいただいたボランティアの皆様、またインタビューにご協力いただきましたグループ「B」の歴代スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

*プライバシー保護のため、データの内容を一部改変しています。

引用文献

- Flick Uwe (1995): *Qualitative forschung*/小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 2002, 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論, 春秋社
- Granovetter, S. (1973): *The Strength of weak ties*, *American Journal of sociology*, 1973(78), pp1360-1380/ 野沢慎司 (2006): リーディングスネットワーク論, 家族・コミュニティ・社会関係資本, 第4章, 大岡栄美訳, 弱い紐帯の強さ, pp123-158.
- Greene, S. (2007): *Including Young Mothers: Community-based participation and the continuum of active citizenship*, *Community Development Journal*, 42(2), pp167-180.
- 平尾恭子, 上野昌江(2005):10代で出産した母親の母親行動とソーシャルサポートとの関連, *小児保健研究*, 64(3), pp417-424.
- 片桐清一(2001):若年妊娠の社会的背景とその支援, *周産期医学*,31(6), pp745-748.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009a):子ども虐待対応の手引き 平成21年度改訂版
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv36/index.html> (最終閲覧日 2014/09/23)
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009b):児童委員・主任児童委員活動事例
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/index.html (最終閲覧日 2014/09/23)
- Marshall, T.H., Bottomore T., *Citizenship and social classes* (1992) /岩崎信彦, 中村健吾訳, シティズンシップと社会的階級, 法律文化社, 1993
- 松田茂樹(2008):何が育児を支えるのか—中庸なネットワークの強さ, 勁草書房.
- 大川聡子(2010):10代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ, *立命館産業社会論集*, 46(2), pp67-88.
- 定月みゆき(2009):若年妊娠・出産・育児への対応, *母子保健情報*, pp53-58.
- 田間泰子(2001):母性愛という制度, 勁草書房